教皇様の声

愛の頂点——ご受難の秘義

永遠の喜びはゆたかな実りを与える苦しみを基とする

1　愛するみなさん、キリスト信者なら常に復活の喜びを心に抱いていますが、このよろこびは、典礼上のこの時期になると格別のひびきを帯びてきます。とは言え、際限なしともいえるこの世の苦しみに目をつぶるようなことがあってはなりません。なにごとにつけ、喜びのみなもとであるキリストのご復活を思い出しては、ご受難の秘義をも考えぬわけにはゆかないように思われます。復活祭を迎え、救い主のご受難とご復活の秘義に導き入れられた私たちは、喜びに至る道程として、苦しみのうちに生き抜くよう招かれています。さらに言うならば、神のおぼしめしにより、苦しみの多いところには喜びもまた多いということです。

贖いのみわざを実現するに当たり、人となられた神の御子は、私たちが罪ゆえに招いた苦しみと死を、ご自身で担おうと決心されました。だからと言って私たちの苦しみと死が取り除かれたわけではありません。私たちを救いの犠牲にあずからせることになさったのです。過ちを犯した結果として当然うけるべきはずであった罰は、十字架につけられた主のおかげで、いまや新しい人類形成のために、神の愛への捧げものに変わったのです。

苦しみは罪の罰であるという考えをイエズスは否定されました。事実、生まれながらの盲人について弟子たちが質問したとき、その病気は罪の結果ではなく、神のみわざを表わすためであると断言なさいました。そして、奇跡的にいやされた盲人が信仰の光をうけたとき、神のみわざが明らかになったのです。（ヨハネ9・3参照）

人間を愛するがゆえに

2　苦しみの意味を理解するには、罪人である人間を見るのみでなく、救い主イエズス・キリストをみつめなければなりません。神の御子は苦しみを受けるに値することは何もなさいませんでしたし、苦しみをさけることもおできになったのに、私たちを愛するあまり、あえて苦しみの道を徹底的に歩んでくださったのです。肉体的にも精神的にもすべての苦しみを耐え忍んでくださいました。精神的な苦しみと一口に言っても、はずかしめや偽証や敵たちのあなどりだけではありません。加えて、弟子たちの逃走による失望と御父からも見捨てられたかのような解し難い状態を、心から悲しみ忍ばれたのです。苦しみは人となられた御子の人性をことごとくおおい尽くしました。

「この人をみよ。」（ヨハネ19・5）　ピラトがこう言ったのは、イエズスへの同情をさそいだして告訴人たちに計画を断念させるためでしたが、キリスト信者はこのことばを、人間の新しい姿発見への招きとして、受けとり、保持しています。イエズスは、苦しみと憎しみ、暴力とあざけりで打ちひしがれた無力なすがたをさらけだしておられます。いまイエズスは、人間にとって最も可酷な苦しみをみずから体験しておられるのです。このようにひどい苦しみをこれほどとことんまで味わったのは神の御子をおいてほかにありません。キリストの人としてのみ顔にも得も言われぬ高貴さが溢れているではありませんか。キリストは人間の理想を実現され、また苦しみを通して、人間の価値を一層高い水準へと引き上げてくださいました。

苦しみは喜びへのかけ橋

3　このように価値が高められたのは、単に苦しみの結果ではなく、苦しみを耐えるときの愛のおかげです。「この世にいるご自分の人々を愛し、彼らに限りなく愛をお示しになった。」（ヨハネ13・1）　キリストの私たちへの愛が頂点に達するのは、ご受難の秘義においてであります。そして、まさにこの頂点から、人間の苦しみを照らし、その意義を明らかにする光がかがやきます。神のご意向によると、苦しみは、愛に成長させ、人間を高め豊かにします。私たちをぺしゃんこにしたり、萎縮させたり、人格の進展を阻んだりするために神が苦しみをお送りになるのではありません。苦しみは、私たちの生活の質を高め、寛大さをますためなのです。

もちろん私たちはイエズスに従いつつ、まわりの人々の苦しみを軽くし、できれば苦しみを取り除いてあげるよう努めなければなりません。イエズスはこの世で、不幸な人には心から同情を示し、効果的に手助けし、多くの病人や障害者を癒されました。そののち、不運に喘ぐ人々ひとりひとりのうちに、ご自分を見つけだし、助けの手を差しのべよ、と弟子たちにお命じになります。

ところで、キリストは、私たちが個人的に経験する避け得ない苦しみについては、もっと大きな愛のために受け入れよ、と招いておられます。弟子たちには、彼らが贖いのみわざに深くかかわっていることを指摘なさいました。「まことにまことに私は言う。あなたたちは泣き悲しみこの世は喜ぶだろう。そうだ、あなたたちは悲しむが、その悲しみはよろこびに変わるだろう。」（ヨハネ16・20）　イエズスが人となられたのは、この世に苦しみのないパラダイスをお造りになるためではありませんでした。キリストのご計画に与りたいなら、いつかは喜びに変わる苦しみを待ち望むべきです。それはちょうど、出産のときの苦しみがよろこびに変わるようなものなのです。（ヨハネ16・21参照）

苦しみとは、永遠の喜びへのかけ橋にすぎません。（ローマ8・18参照）　そして、永遠の喜びはゆたかな実りを与える苦しみを基としています。み摂理の中では、すべての苦しみは産みの苦しみです。そうして新しい人が誕生するのです。だからこそ、次のように言うことができます。すなわち、みずから犠牲になったキリストは、人間を神と和解させることによって、苦しみとの和解を実現してくださった、と。苦しみを、愛のあかし、よりよき世界建設の手段、となさったからです。

（一九八三・四・二十七）

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1984 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

復活の意味

私とは？

復活徹夜祭の典礼を取り行なっているところです。典礼中の朗読と答唱詩篇が語りかけ、教会の祈りの言葉がこだまするなかで、私とは誰なのだろうという問いかけが思い浮かびます。キリスト信者として、私はいったい何者になったのだろうという問いは、とくに今夕受洗されるみなさん方にせまってくることでしょう。しかしこれはまた、久しい以前に洗礼の消えることのない印章を受けた私たち皆にとっても同じく根本的に重要な問いかけと言えます。

初代のキリストの証人たちにとっては、もっとも重要な質問でした。私とは？　この聖なる夜を迎える私は一体何者なのか。

夜も更けてきました。聖ルカによる福音はすでに、暁と共に訪れる出来事を伝えています。三人の婦人、マグダラのマリアとヨハンナ、そしてヤコボの母マリアは墓に着きましたが、後になって聖ペトロも確認するように、キリストの御体が見当たりません。金曜日の午後に御体を安置した墓の奥から声がします。

「なぜ死者の中に生きたお方をさがしているのか。主は、ここにはましまさぬ。よみがえられた。」(ルカ24・5～6)

聖ルカの語る福音は、すでに、私たちに明け方の出来事を告げ知らせてくれました。こうして復活徹夜祭の典礼はこの復活への希望のうちに展開してゆきます。

私はだれなのだろう。キリストは復活したというが、これによって私という人間はどうなったのだろうか。キリストは人間のために、私たちの救いのために人となられ、そして今また私たちのために復活し給いました。

人間でありキリスト信者である私とは？

聖パウロがローマ人への手紙の中で答えてくれています。パウロのことばは今夕受洗される方々は言うに及ばず、全信者にとって重要な意味をもっています。

「キリスト・イエズスにおいて洗礼を受けた私たちはみな、キリストの死において洗礼を受けたことを、あなたたちは知らないのか。それゆえ私たちはその死における洗礼によってイエズスと共に葬られた。それは、御父の光栄によってキリストが死者の中からよみがえったように、私たちもまた新しい命に歩むためである。」(ローマ6・3～4)

全世代のキリストの弟子と証人たちは、復活徹夜祭の典礼の間にこの答えを耳にしてきましたが、いままた私たちも同じ答えに聞きいります。

私とは「キリストの死において」洗礼を受けた者、今後は、罪の配下につかないためにキリストと共に十字架につけられたあの「古い人」。(ローマ6・6参照)　私とは、主とともに新しい生命のうちに歩むために、キリストと共に墓に葬られた者である。

これこそまさに復活の秘義がもたらす答えです。それは、キリストの死と復活の答え、信仰の答えであって、単なる概念ではなく、存在そのもの、現実そのものに関わっています。

この復活の夜の新受洗者のみなさんは、洗礼を通してこの答えを受け取りました。またそれは、キリスト信者になるために、かつて受けた洗礼という共通の絆のもとに集う、私たち全員が受けとる答えでもあります。(…)

回心と信仰の力で、この答えをふたたび生き生きとさせたいものです。

「…もし私たちがキリストと共に死んだのなら、また彼と共に生きることをも信じる。」(ローマ6・8)　(一九八三・四・二)

聖十字架のちから

「あなたは、いけにえも供え物も望まれず、ただ私のために体を準備された。あなたはやきつくすいけにえと罪のためのいけにえとを喜ばれなかった。そこで私は……『神よ、私はあなたのみ旨を行なうために来る』と言った。」(ヘブライ10・5～7と詩篇40・7～9)

1　昨年、主の御告げの祝日に贖いの聖年の扉が開かれましたが、「私のために体を準備された」とあるように、世の贖いは主のご託身によって始まりました。

そして、本日は、キリストの十字架から贖いの扉を開きます。

めでたし、十字架の木よ。その十字架上で、キリストは世の救いを成就なさった。御子は十字架につけられました。御子は十字架の上で御父のみ旨をお果たしになり、「すべてはなしとげられた」という言葉をもって、いけにえのご生涯を閉じられたのです。

2　特別聖年の扉を通る人は主に語りかけます。キリストよ、御身の十字架という言葉で話しかけてください。私たちの霊魂には無限のねうちがあることを、十字架にはりつけられ給うた御体を通してお教えください。「よし全世界をもうけても、自分の命を失ったら、それが何の役に立つだろう。」(マテオ16・26)ご受難とご死去によって、つまり、十字架であがなわれた今、霊魂を失って何を得ることができるというのでしょう。

世に惑わされることのないように、回心して償いを実行しましょう。これはすでに冒頭にあらわれている叫びです。キリストよ、御身の十字架によって、回心と償いの必要を力強く人々にお教えください。

(…)キリストの十字架という言葉が人々の心のなかで、救いの力を取りもどしてくれますように。

3　天の御父よ、御身はキリストの十字架において、世界、人類との和解を成就なさいました。私たちは何の功徳ももたず、御身の望みを果たしてもいませんが、それにもかかわらずみ前に参りました。

ですから、御子の十字架を御身にお捧げいたします。(…)　十字架から、贖いの力が一段と輝きますように。

御身のみ業がふたたび人と世にある悪にうちかち、善が悪より強いことをおしめしくださいますように。

私たちが数多い罪の重さに押しつぶされることのありませんように。「彼らをお赦しください。彼らは何をしているかを知らないからです。」(ルカ23・24)　十字架の力がすべてを支配しますように！

4　カルワリオの十字架のもとにたたずみたもう御母よ、私たちのために取りなし給え。みずからの体ですでにキリストの苦しみの欠けたところを満たしたみなさん(コロサイ1・24参照)、そしていま、そのための努力を惜しまぬみなさん、私たちと共にとどまってください。

病に苦しんだり、見捨てられたり、キリストへの信仰ゆえに迫害を忍んでいるみなさん、あらゆる国、あらゆる地で、自分の苦しみを主の苦しみにあわせてささげているみなさん、私たちのために取りなしてください。(…)

5　(…)キリストよ、御身を礼拝し、たたえます。聖なる十字架上の死によって世をあがなってくださいましたから。聖なる神、聖なる砦、聖なる永遠の神よ、私たちをお憐れみください。

説教・講話・書簡等の抄訳

良心形成の出発点
真理を愛する

1　「こうして私たちは子供ではなくなり、人を偽善と誤謬に迷いこませる企みのままに、色々な教えの風に吹きまわされ、翻弄されなくなる。」(エフェゾ4・15)聖パウロのこのことばは、信仰において大人となり円熟した判断を下し「愛に基づいて真理」を生きるため、正しい選択のできる道徳意識をもつようにと教えています。

良心形成は私たちが第一に果たすべき義務ですが、その理由は簡単で、良心は誤ることがあるからです。誤りが優勢であるときには、人間の人格にはなはだしい悪影響をおよぼします。自由を行使するにあたって真理に逆らうため、自己形成を妨げられてしまうのです。

ところで、この成熟した道徳意識への旅も、今日非常に流行している真理に対する無関心という致命的な病気にかかると、スタートを切ることさえできなくなります。真理などたいして重要ではないと思っている人が、良心の判断は正しくなければならないと考えつくはずはありませんから。

2　この病気にはおびただしい症状があらわれてきます。たとえば次のような考えに、真理に対する無関心な態度をみることができます。論理学で言う真理と虚偽とは、好みの問題、個人の決断や文化的社会的諸条件の問題にすぎない。あるいは、ある判断が正しかろうがまちがっていようが、そんなことは気にしないで思うとおりにすればよい。さらには、神のお気に召す生き方は、実のところ、私たちの神についての考えが真理であるか否かによるのではなく、私たちの信奉することがらを誠実に信じるかいなかにかかっている、など。また、次のような見解にも真理に対する無関心がうかがえます。人間にとってより一層重要なのは、真理をわがものにすることではなく、真理を探究することである、真理とは、決して手に入れることのできないものだから。こうして、結局は、どのような考えをもつ人でも当然尊重してやらねばならないという態度と、客観的真理の存在を否定することとを、混同するはめにおちいります。

3　万一、真理について今述べた様な無関心をかこつなら、自分の良心について何も考えないことになり、遅かれ早かれ、個人あるいは多数意見を受け容れることが良心に忠実を保つ態度だと思い込んでしまうでしょう。

このような精神の重荷はなにが原因しているのでしょうか。究極的には高慢です。教会の倫理・道徳の伝統をみても、高慢こそ、人間のあらゆる悪の根源であることがわかります。高慢にとらわれると、何が真実で何がいつわりかを決める権利は自分にあると思ってしまいます。そして、真理は私たち被造物の知性を超えるという事実を否定してしまうのです。その結果、真理は自分の発明物ではなく、賜として与えられたものであるとみとめ、真理に心をひらき、これを喜んで受け入れるべきことを、疑問にふしてしまいます。

そこで、真理に対する無関心の原因は、人間の心の奥底にあることがはっきりしてきます。真理を愛さなければ真理は見出せません。真理を知りたいと望まなければ、真理は知られないままでしょう。

4　「愛にもとづいて真理を生きよ」、と使徒は勧めています。良心形成の出発点、すなわち真理を愛することについて述べてきました。今度は、良心形成にすこぶる重要な点をいくつか指摘したいと思います。

特別聖年の成果として、教会は、ゆるしの秘跡を熱心にさずけることを第一に望んでいます。これまでの話と関連させてみると、ゆるしの秘跡はとくに大切な要素となってきます。実に、回心とは、恩寵のもたらす最も貴重なたまものです。良心が正しい判断をくだすことができるためには、主に立ち返った心、善を愛するようになった心が、良心にぜひとも必要な条件となるからです。(…)

私たちが考えをすすめるにあたって取りあげた聖パウロのテキストによると、キリストは「ある人を使徒とし、ある人を預言者とされ」ました。人間の道徳意識は教会の中で成長し、成熟します。(…)教会の教導職に忠実であれば、道徳意識が真理の道からそれるのを防ぐことができます。

ですから、各人の道徳意識と教会の教導職とを、二つの相争うもの、互いに相容れないものであるかのように考えるのは正しくありません。教導職が権威をもつのは、キリストのみ旨によって、道徳意識が確実に真理を手に入れて、真理にとどまることができるためなのです。(一九八三・八・二十四　一般謁見)

祈りのねうち

色々なところの、とくに若人の種々の運動をみていると、若者たちが祈りのねうちを再発見していることがわかります。祈りの、人間的かつ聖書的な深い意味が明らかになり、神と交わり、自分および隣人に意志(心)をひらき、神の無限の豊かさを前に自らの底なしの貧しさを悟るようになってきたのです。このようなときには、シエナのカタリナが言っていたように、私たちの存在は《私たち自身から》来るのではなく、《存在そのものである御方から》与えられたものであることが一層明らかになります。

祈りこそ、神であらせられるキリストをはじめとして、天国の諸聖人の最高の活動であります。

新約聖書を読めば、イエズスが私たちのために御父のみ前で祈り、取りなしを続けてくださっていることがわかります。(ヨハネ14・16とヨハネ①2・1とローマ8・34参照)　ヘブライ人への書簡になると、さらに詳しくなり、「(キリストは)ご自分によって神に近づく者のためにとりつごうとして常に生き、その人々を完全にお救いになる」(7・25)と言っています。

キリストのこのような救いのための祈りがあるからと言って、私たちと聖人たちの祈りが不要になるわけではありません。聖人たちも私たちも、自分と他人のため、救いの恩寵を願ってキリストと共に祈れ、と要求されています。

神のお導きはまことにすばらしいものです。祈りは歴史の歩みと人間の行く先を照らし、支えてくれます。祈りは、人間の連帯性のしるしです。また、神のみ旨に素直に従うならば、互いに助け合うことができるというしるしでもあります。

ところで、神の御母、主のはしため聖母マリアほどに、神のみ旨に素直な人がいたでしょうか。聖母ほど、神をたたえ、礼拝し、祈願しつづけている人が他にいるでしょうか。第二バチカン公会議によると、聖母マリアは、「天にあげられたのちも、この救いをもたらす務めを放棄せず、かえって数々の取り次ぎによって、我々に永遠の救いのたまものを得させてくださっている。」(『教会憲章』62)

まことに聖母マリアは類なき祈り手です。マリアさまは、すべての人の救いを願い、双手をあげて神に心をあげ、全人類のために嘆願してくださいます。(一九八三・六・十三)

不変の教え

洗足（聖木曜日）

「あなたが私の足をお洗いになるのですか。」（ヨハネ13・6）シモン・ペトロはこう言いながら、次のように考えていました。人の足を洗うのは召し使いの仕事である。足を洗ってもらうのは主人である。とすると、私シモン・ペトロは、先生であり主であるお方から、このような奉仕を受けるわけにはゆかない。

そんなことをすれば、正義に関する秩序でもある根本的な秩序を乱すことになる。公正と正義から言ってもそんなことはできない。

こうして聖ペトロは、公正な心ゆえに、過ぎ越しの晩餐の前にキリストが足をお洗いになるのを拒みました。

ところが、先生であり主であらせられる御方はおゆずりになりません。水をいっぱいにはったたらいと手ぬぐいをもって、弟子たちの面前に立っておられます。そして、こうおっしゃっているようです。「譲歩しなさい！」「私のするままに任せなさい！」「偉大な奉仕を始める邪魔をしてはならない！」

この奉仕には新しい秩序が含まれています。新しい掟、新約です。私のするままにさせよ、新しい契約による奉仕をこの洗足で始めるのだから。つづいて私は、私の体と血の犠牲の秘跡をささげるのだから。十字架上の犠牲と死、偉大な終わりのない新しい契約による奉仕をしなければならないのだから。

私の奉仕を受け入れれば、おまえは「私とのかかわり」をもつことができる。おまえと他の全ての人が「私とのかかわり」をもち、私と共にとどまるのだ。そして、私を通して御父と聖霊とも親交を結ぶことができる。

今は私のするがままに任せなさい。まさにこの務めのために「生まれこの世に来た」（ヨハネ18・37）のだから。この奉仕、つまりこの務めに世の救いがかかっているのだから。

譲歩したシモン・ペトロは、新しい秩序が自ら忠実を保ちたかった旧律法に取って変わったことに気がつきました。

いまだ旧律法を守っていましたが、心ではすでに新しい法に気づいていたのです。旧約に属する人間ではあるが、すでに、先生であり主である御方との交わりに入っていました。そこでペトロは申し上げます。「主よ、では足ばかりでなく、手も頭も。」（ヨハネ13・9）ペトロは主との「かかわり」を望みました。あがないのみわざによる清さを望んだのです。

そこでキリストは、ペトロだけでなく皆に向かって仰せられました。「私は主または先生であるのに、あなたたちの足を洗ったのであるから、あなたたちも互いに足を洗いあわねばならない。」（ヨハネ13・14）

（…）主の晩餐の典礼によると、贖いとはキリストの救いの奉仕です。教会内でいつまでも続く奉仕なのです。主の御体と御血の秘跡を通して、また、悔悛と和解の秘跡のかたちで続くみわざです。「もし、あなたを洗わないなら、あなたは私と何のかかわりもなくなる。」（ヨハネ13・8）

願わくは、私たちもシモン・ペトロと同じく、キリストとのもっと深い「かかわり」をもちつづけることができますように。

（一九八三・三・三十一）

使徒書簡『苦しみのもつ救いの力』

1　苦しみのもつ救いの力を明らかにしたのち、聖パウロは、「キリストの体である教会のために、私の体をもってキリストの御苦しみの欠けるところをみたす」（コロサイ1・24）と書いています。

苦しみは、人類史の一部であり、神のおことばの照らしを受けていますが、聖パウロは苦しみの道をながらく縫うがごとく歩んだあとで、右の言葉を書きしるしたようです。聖パウロのことばは、言ってみれば、よろこびを伴う最後の発見と言えます。だから、「私はいま、あなたたちのために受けた苦しみをよろこぶ」と述べているのです。苦しみの意味を知ると、よろこびが訪れます。さらにこの言葉は、聖パウロみずからの体験から得た個人的な発見を述べたものではありますが、全ての人々にあてはめることができます。使徒はみずからの発見を人々とわかち合い、それによろこびを感じています。なぜなら、苦しみの意味を発見したことは、パウロ同様人々にも、救いにおける苦しみの意味理解に役立ったからです。

2　（…）苦しみは、この世に生きる人なら誰一人としてさけては通れないテーマ、ある意味で、人間と共存するテーマと言えましょう。

それゆえ、苦しみについては繰り返し考えなければなりません。聖パウロはローマ人への書簡中、「全被造物が今までなげきつつ陣痛の苦しみにあっている」（8・22）と書いていますし、人間は動物界の苦しみを知るだけでなく動物としての苦しみを経験する存在ではありますが、それにもかかわらず、「苦しみ」という言葉のもつ意味は、とりわけ人間に固有であると思われます。苦しみとは人間自身と同じほど深く神秘なものです。苦しみは苦しみ独特の仕方で人間の神秘をあらわし、同時に、人間の神秘を超えているからです。苦しみは、人間の有する超越的な面に属すると言えましょう。苦しみにおいてこそ、人間はある意味でみずからを超えるべく定められています。また、人間は神秘的な仕方で苦しみに召されているのです。

3　苦しみは、とくに贖いの特別聖年中に考えるべきテーマです。まず第一に、贖いが実現したのはキリストの十字架を通してである、つまりキリストの十字架の苦しみのおかげであったからです。また、聖年中に、「人間一人ひとりが教会にとっての道である」という『人間の贖い主』に述べられている真理を思いださねばなりません。人間が教会にとっての道になるのは、特に苦しみというものが人間生活に入り込んだ時です。苦しみは、人生のいろいろな時期に、異なった仕方で、さまざまな規模をとって現われます。しかし、どのようなかたちで現われるにしろ、苦しみは、この世における人間の存在とは切っても切れないように見えますし、事実、両者を切り離すことはできません。

この世に生きる人間はなんらかのかたちで苦しみという長い道を歩まねばならないわけですが、この道こそ、教会が人間に出会う道になります。（…）　キリストの十字架上のあがないの秘義から生まれた教会が人間に出会うべく努めるとすれば、それは人間が歩む苦しみの道においてです。教会と人間とのこの出会いが、実は「教会にとっての道」になるのであり、これこそ最も大切な道なのです。

4　これが苦しみについての黙想の由来です。人間の苦しみは、「同情」をよびおこします。そして、「敬意」を喚起します。さらに、独特な仕方で、「恐れ」をいだかせます。苦しみには特別の秘義がふくまれているのです。あらゆる種類の人間の苦しみに敬意を表する心は、のちに述べる、深い「心の要求」および「信仰の命令」という言葉で表わされるものの始まりです。苦しみに関する以上二つの根拠はたがいに大変似たもので、結局は一つに帰すると思われます。すなわち、心は恐れを克服せよと命令し、信仰は、例えば本文の最後に引用した聖パウロの言葉のように、苦しみの中味を教えてくれます。（…）【序】の抄訳

愛するみなさん

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部六十円送料六十円
■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393